

「記憶の玉手箱から、あるローカル鉄道にて」

岩田 彰峰

あるローカル鉄道に乗ったときのお話です。始発駅の車内は4時台とあって高校生の専用列車並み。ここに、あなたも乗り合わせたつもりになってみてください。

高校生諸君は相向かいのロングシートに深々と腰掛けて、伸ばした長い足と足が通路の真ん中で交差するほどです。そして彼らの多くは、いつの間にか自分の世界に入っています。そう、スマホに釘付けなんですよ。

見渡してみると、90代とも思しきご夫婦がドア付近のポールにしがみ付いているんです。発車までに何とかあの二人を座らせてあげたいのだが…と、行動をためらっているうちに私は先を越されてしまいました。

「君、ちょっと詰めてくれると、この方たちが座れるんだけど」。ほとんど話し声のない車内のこと、よく聞き取れました。声の主は30代くらいのサラリーマン風の青年でした。でも高校生の反応は無し。青年が繰り返すと「うるせえ」とだけ言ってスマホを見たまま。このとき私は咄嗟に良からぬことを想像してしまったのです。彼は若い。ひょっとしてキレてしまうのではないかなどと。

ところがそんな思いを一掃するかのような出来事が。ランドセルを背負った小学生の女の子が通路の足の間をピョンピョン飛び越えて、その高校生の正面に立ったのです。「お兄ちゃん、こっちに詰めればおじいちゃんとおばあちゃんが座れるでしょっ」。甲高い凛とした声に車内は一斉注目です。当の高校生はといえば、反射的に立ち上がって呆然の風体です。すかさず「はい、どうぞ」と女の子。老夫婦は何なく座ることができたわけです。

途中駅で下車した私ですが、偶然でありましょうか、その青年も下車したのです。話し掛けてみたら、にこやかに彼はこう言ったんです。「あれこれ迷ったりしないで、あれだけすんなり言えたあの女の子って、すごくないですかあ。ああいうのを菩薩っていうんですかねえ」。なんとなんと、いきなり菩薩ですよ。絶句してしまった私です。仏教では十界じっかいとって、下から順に、地獄・餓鬼・畜生と数えて9番目、仏に最も近い世界が菩薩とされるのですが、こんな次元で捉えた彼の凄さに恥じるべき私でした。

とまどいもなく行動できた女の子、思わず我にかえったのであろう高校生、そしてただの青年ではなかったあの青年。みんな菩薩の一面を備えていることを、まるでドラマのように見せてくれたローカル鉄道の記憶は今も色濃く残っています。